

高田報告への 文献班コメント

スライド資料の写真・図等の撮影はご遠慮ください

2024年12月15日（日）

活水女子大学 細井浩志

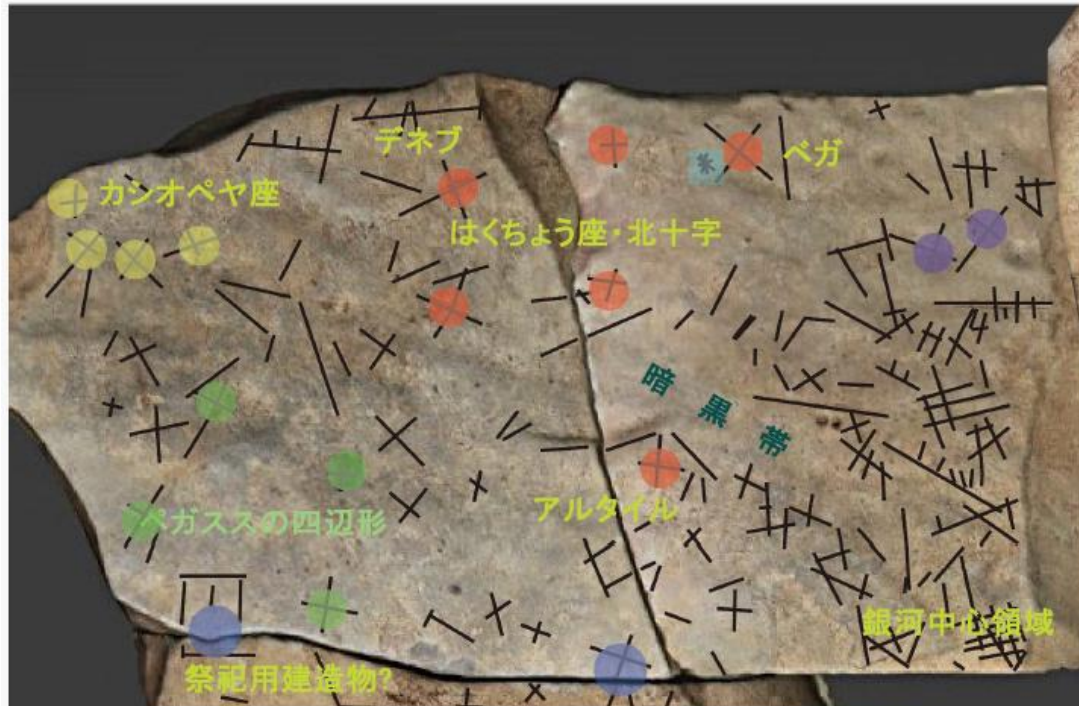
【2026年1月一部改変】

吉野ヶ里遺跡の蓋石・小口に
刻まれた線刻の解釈について

線刻を星とみる場合の問題点

- ① × を星とみることができるのか？
- ② 星図とした場合の歴史的 위치づけ

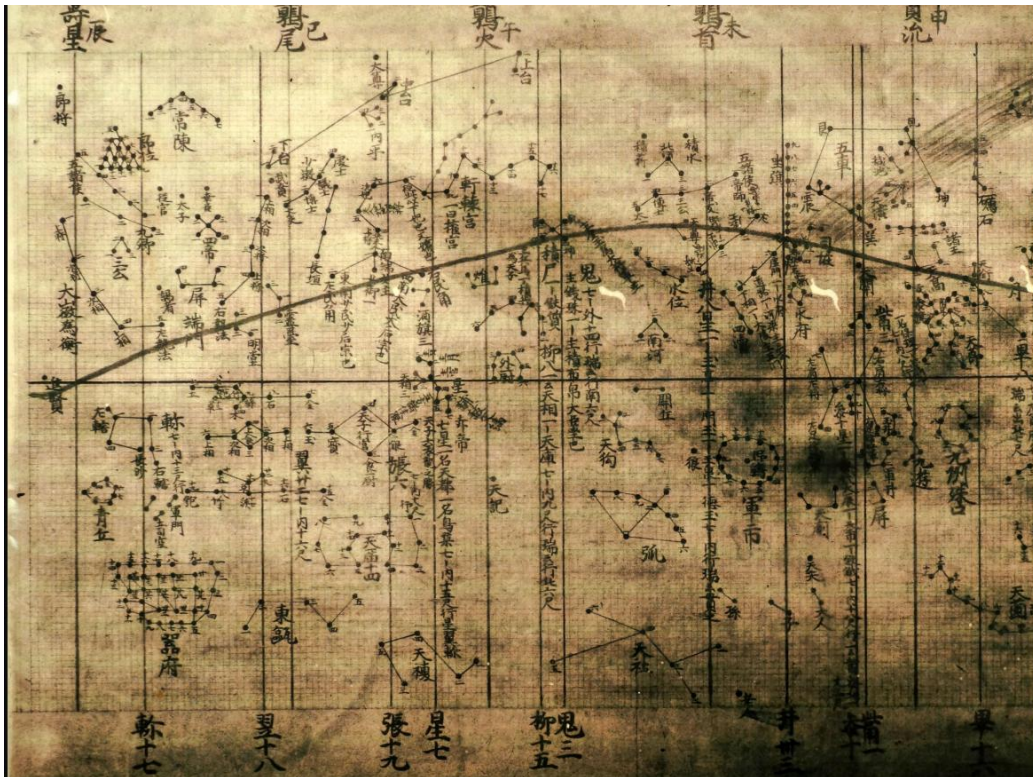
① × を星とみることができるのか？



←高田報告資料より

中国の星図は古くより星を○か●で表現

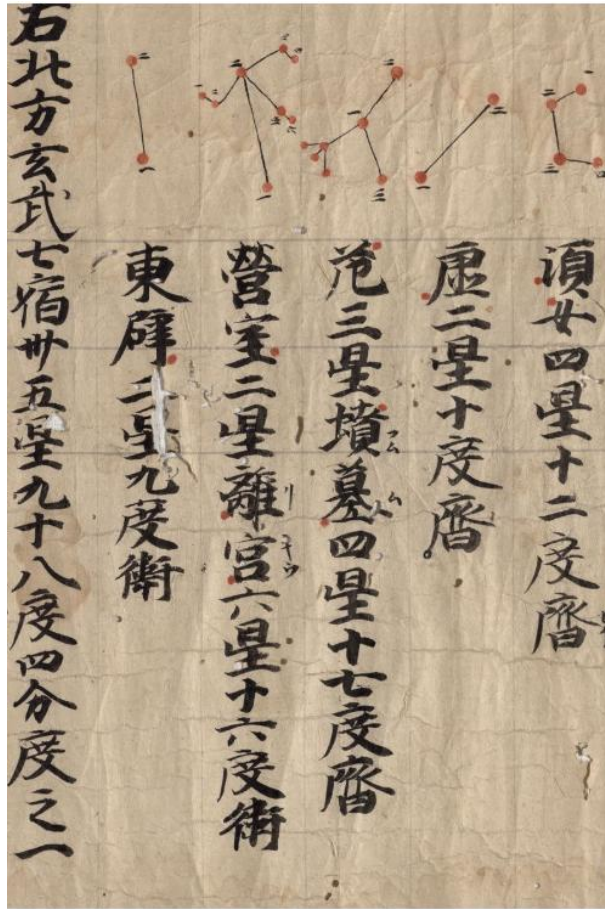
東晋期（4～5世紀）の原図を初唐の星座名に修正した天文図に基づく「格子月進図」
（竹迫2022, 写真は国立天文台HPより）



呉越王銭元瓘墓の石刻星象図(10世紀)(復元)

(写真は省略)

「石氏星官簿讚」……『三家簿讚』の一（3～4世紀の陳卓がまとめた星図がもとか）。京都府立京都学・歴彩館歴史資料アーカイブより（館古027若杉家文書）



- 須汝（女）……水瓶
- 虚……水瓶・小馬
- 危……水瓶・ペガサス
- 宮室（室）……ペガサス
- 東壁（壁）……ペガサス

（大崎正次『中国の星座の歴史』雄山閣出版、1987）

弥生時代における中国の式盤の星も○

曾布川2015より

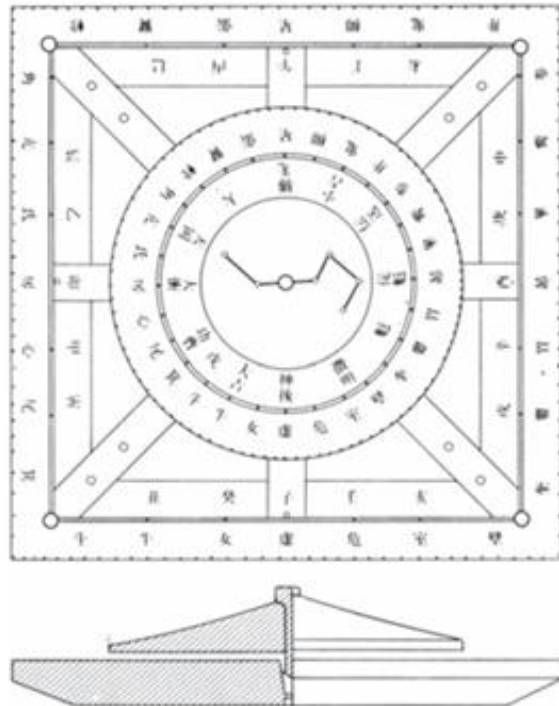
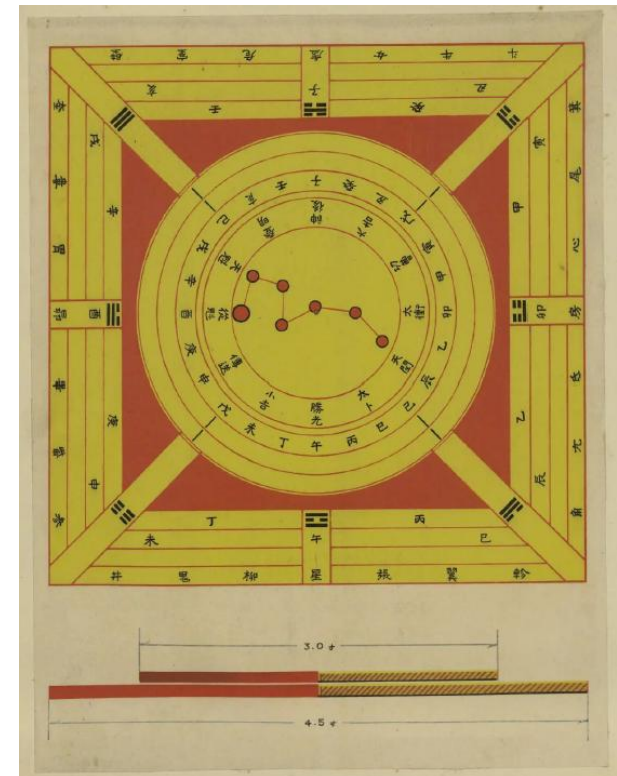


図3 甘肅武威磨咀子62号墓 六壬式盤
(模本) 新 辺長9cm

楽浪遺跡出土式盤復元図（東京帝大1930より、国会図書館デジタルコレクションによる）



キトラ古墳の星図……7世紀末～8世紀初

(奈良文化財研究所HPなぶんけんブログ「**キトラ天文図**の観測年代に関する「謎」」〔若杉智宏氏執筆〕2021年7月1日)

(<https://www.nabunken.go.jp/nabunkenblog/2021/07/20210701.html>より)

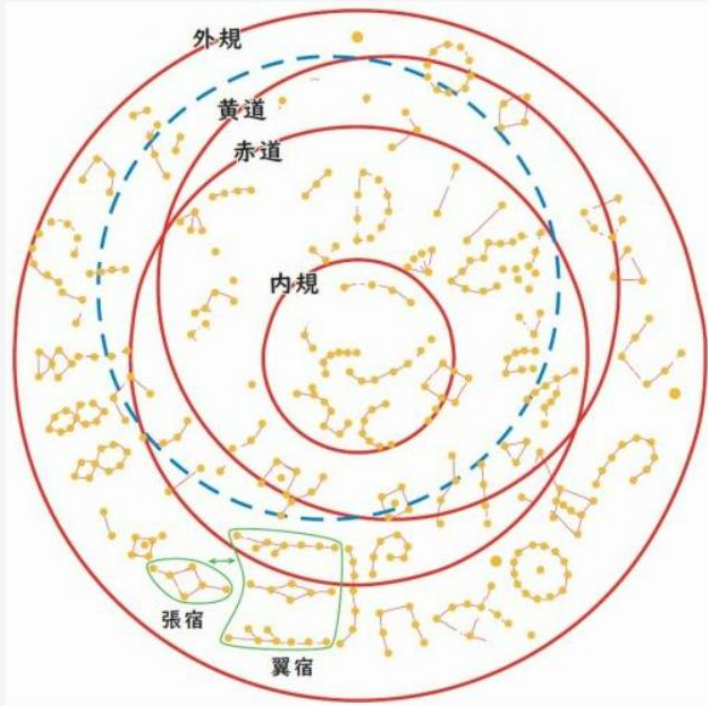


図1 キトラ天文図復元トレース図

(緑で囲んだ翼宿と張宿は位置が入れ替わっており、本来とは逆になっている。
また、黄道は位置が間違っており、青い破線の円がほぼ正しい黄道の位置。
内規・赤道・外規の半径は、それぞれ8.4cm・20.1cm・30.3cmである。)



図2 積卒 (大小2種の下描き線が残り、描き直しているのがわかる。)

高松塚古墳の星宿図 7世紀末～8世紀

（「高松塚古墳星宿図の南北逆転復元図」 竹迫忍『古天文の部屋』より）

[高松塚古墳星宿図の南北逆転復元図](#)

（図は省略）

（写真は省略）

高松塚古墳の概要 | 文化庁

(写真は省略)

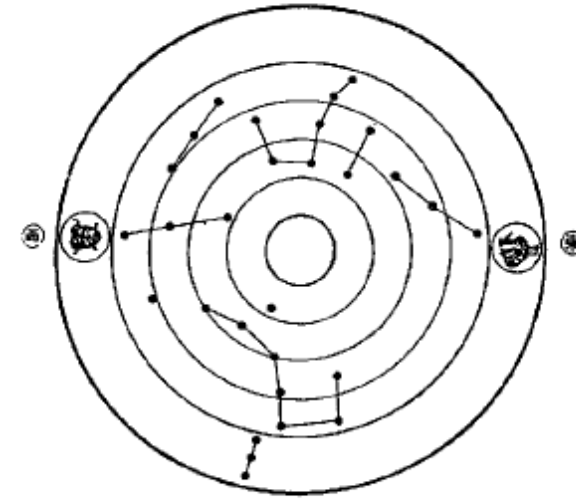
朝鮮半島の古代墳墓の星図も○か●

高句麗舞踏塚天井の星宿図（有坂
1999より）4世紀末～5世紀初

【写真は省略】



高句麗角抵塚天井の星象図（網干
1999より）4世紀末



角抵塚天井部星象図

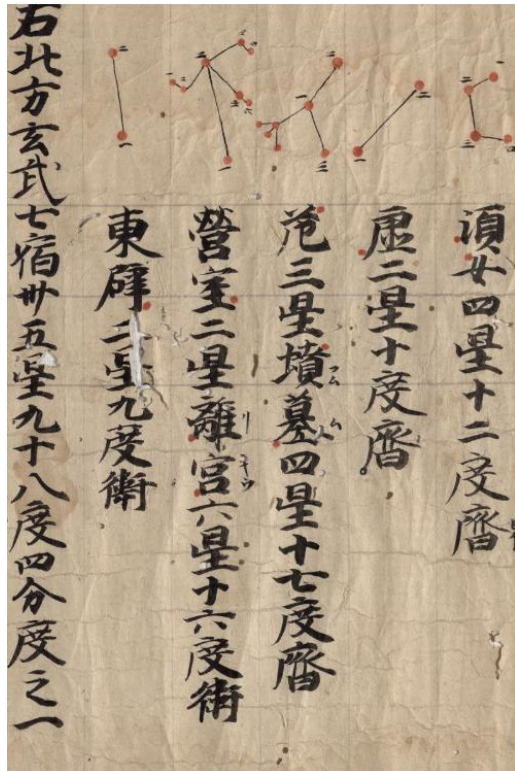
呪符木簡・星宿木簡は□で星を現す

- 奈良文化財研究所『木簡庫』より →
<https://mokkanko.nabunken.go.jp/ja/5AJGSF56000101>
 - 藤原京跡西方官衙南地区 第79次調査
 - 天武朝末年（7世紀末）の井戸より発見
 - 上方は『正統道蔵』所収『天原発微』の羅堰九星（牛宿＝山羊座）によく似る（松村1997）
- 呪符木簡は□を多用
⇒石に○の線刻が難しければ、○を崩した□で線刻する方法もあったはず



吉野ヶ里図には（中国星図の）星と星をつなげる線がない→星座認識がない？

京都府立京都学・歴彩館歴史資料アーカイブより（館古027若杉家文書 石氏星官簿讃）

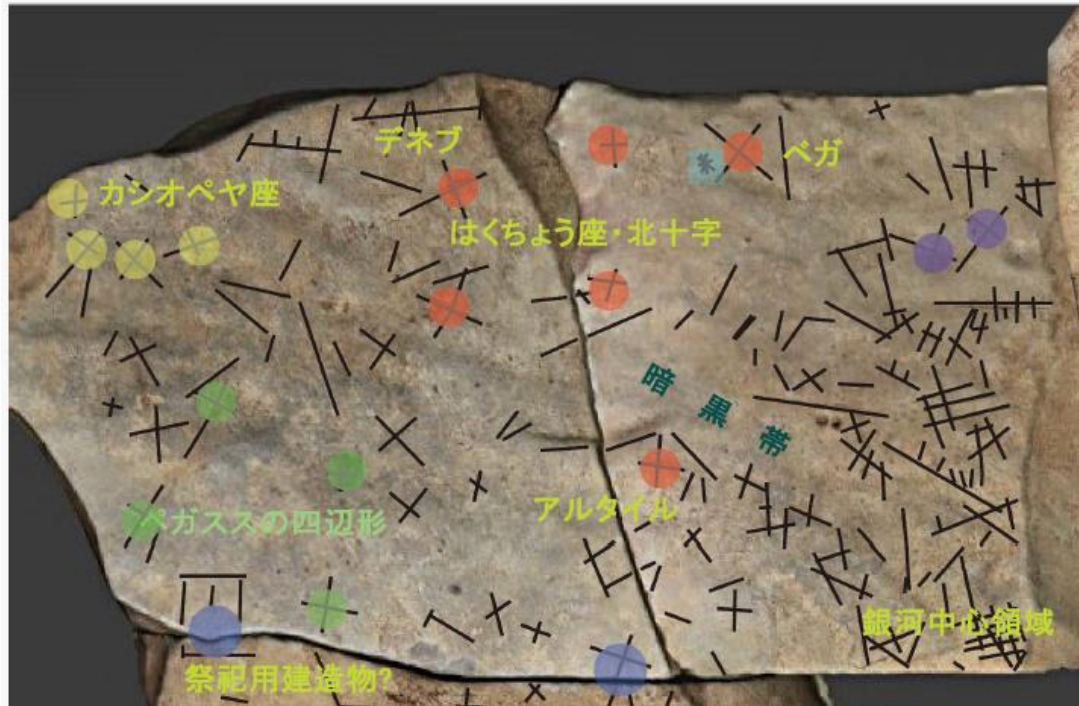


「石氏星官簿讃」は漢代以前の中国星座だとされる

- 須汝（女）……水瓶
- 虚……水瓶・小馬
- 危……水瓶・ペガサス
- 營室（室）……ペガサス
- 東壁（壁）……ペガサス

（大崎1987）

×と星との対応関係



⇒まだ同定していない×などが、
今後うまく解釈できるか

……高田報告でも課題とする

←高田報告資料より

小結

- どうやら石刻は**伝統的**中国天文学の様式の星図ではないらしい
⇒星図ではない、もしくは伝統的中国天文学以外の天体観測による星図である可能性を追求することが必要
 - 田中禎昭氏指摘の○に＋の文様のある装飾古墳の存在
→**新来**の**中国天文学的な星の○表現**に、**吉野ヶ里周辺在来的な星の×表現**を重ねることで、「これが星」であることを示そうとした可能性はある
- ★大原石棺墓群の＊←（渕ノ上報告：星らしく見える）

②星図とした場合の歴史的位置づけ

この「星図」はどのような思想を背景とするか？

- 北斗七星・北極星・太陽などの目立つ星座・天体を王者の象徴などとして信仰する事例は中国天文学に多い
→吉野ヶ里「星図」には特定の星の強調がない
- ホロスコープ占星術のように星の配置で占うための「星図」？
→その位置が重要な惑星や太陽・月などが「**それとわかるように**は」描かれていない
……高田報告の今野批判コメントと基本は同じ

この「星図」はいつの天空か？

- 「いつ」とは日時ではなく、吉野ヶ里の社会にどのような事件が発生した時の天空か、の意味

→①被葬者が死んだとき？ ②葬儀の時？

③その他の大事件？

様式化されたようにみえない星図の「星空」

- 星空をリアルにスケッチした星図？

→ある日の天空の星の配置が墓の蓋石に標されてそのまま意味を持つほど星に対する関心がこの地域にはあったのか？

→星に関する関心が余りみえない日本列島の他地域に比べて、**星への関心度が高すぎるのではないか**

★古代の墓の蓋石なら、被葬者を象徴する、太陽や月、目立つ星、北斗七星などの星座をそれとわかるように標す方がしっくりする

⇒様式化された北斗七星や惑星が線刻されていれば、素直に「星辰信仰があった」「前提として天体観測をしていた」と判断できるが……

葬送とは元は別の目的で作成したものの 転用なら（←浏ノ上報告）

- 墓の蓋石ではない→星図として作成した物か？
- 星図なら紙などに描いた原図が必要
→星図なら紙や布などに描いたものの方が使いやすい
⇒何かのモニュメントとしての石刻星図？ 全天を描いた星図の
原画（基準）としての石刻盤の**一部**？

星空をどのような方法でスケッチしたのか？

①認識の問題

- 星座と認識せずに見たまま星を×で標した？
- 頭の中で星座としてまとまりがあった？

②手順の問題

- 上を向いて紙に墨で星を描いた？……石刻には一定の所要時間
→紙などに一度描いた星図を見ながら刻んだのではないか

③筆写力の問題

- スケッチする技量はどの程度必要なのか？

⇒総合的な技量はどの程度必要か？（天文班・考古班への質問）

……高田報告（解釈の更新状況3）ではかなり高度な技量との評価

→弥生時代にふさわしいのか？

おわりに

吉野ヶ里遺跡の蓋石・小口に刻まれた線刻の解釈

- 星図でない可能性はなお否定できない

→ 星図でないなら何か？

①鳥？……鳥の集団行動を記号化？→星図より説明が難しい？

②呪符？……並び方などに様式性・規則性がない

→×だけで効果があるのか？

星図としても、どのような思想を背景に、
何のために描いた物か不明

- 伝統的な中国天文学に基づかないものらしい

→「貝の道」などを考えると、東シナ海・太平洋などでの航海のために習得した天体観察技術に基づく可能性の方が高いか（高田報告解釈その3でも言及）

★ただし中国天文学の影響があったことを排除するものではない
……高田報告は朝鮮半島の帶方郡での観測との推測も提示

→その星図を在来的な表現法で写した？

⇒今後の研究の進展に期待

参考文献

- 網干善教「高松塚古墳と星辰図」『高松塚古墳の研究』同朋舎、1999
- 有坂隆道「高松塚の星」『古代を解く鍵』講談社、1999
- 大崎正次『中国の星座の歴史』雄山閣出版、1987
- 河津秀明、真貝寿明「古星図に見る歴史と文化」『日本天文教育普及協会会報』20－3、2008
- 曾布川寛「天上より降臨する神々と祖霊」『古文化研究』14、2015
- 竹迫忍「『格子月進図』の原図となった古代星図の年代推定」『数学史研究』第Ⅲ期1－1、2022
- 東京帝国大学文学部編『楽浪』刀江書店、1930 (<https://dl.ndl.go.jp/pid/1243528>国会図書館デジタルコレクション)
- 村山修一『日本陰陽道史総説』塙書房、1981
- 松村恵司「藤原宮呪符に描かれた星座」『季刊明日香風』61、1997
- 宮島一彦「日本古代の天文知識」細井浩志編『新陰陽道叢書第一巻古代』名著出版、2020
- 山下克明「『三家簿讃』の考察」大東文化大学東洋研究所編『若杉家文書『三家簿讃』の研究』大東文化大学東洋研究所、2004

コメント終了